



TITLE:

湯河原T群を中心とした離脱個体の
移動と繁殖について(Ⅲ 共同利用研
究 2 研究成果)

AUTHOR(S):

村松, 正敏

CITATION:

村松, 正敏. 湯河原T群を中心とした離脱個体の移動と繁殖について(Ⅲ
共同利用研究 2 研究成果). 霊長類研究所年報 1971, 1: 69-69

ISSUE DATE:

1971-09-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160439>

RIGHT:

究保護林のため、初期調査一歩ビュレーション把握の調査を、45年10月5日から、10月18日の14日間にわたり、木曽駒ヶ岳東面において行った。

ニホンザルとの接触は、10月6日に中央西線倉本駅東方2.5km地点において、初めて発見した。

同地点とは糸瀬山(1,867m)を中心にして、対向点である、須原水沢において、ニホンザルの声を確認しており、今その姿と声を確認した対象が同一のものとは、假かに断定し難いが、糸瀬山周囲においてはかなり、密度が高いものと思われる。また、10月18日に、池・尻斜面において、柿を食したものと思われる。以上の事をふまえ、倉本駅北東2kmの棧沢周囲においても、その痕跡濃厚であった。よって、この調査から最少限に報告できることは、糸瀬山と棧沢周囲に広がりをもつ2群が、少なくともいるのではないかと推察される。

湯河原T群を中心とした離脱個体の移動と繁殖について

村 松 正 敏

湯河原T群の個体数は'71・2月現在で104頭であった。社会性比率は年々低下し、'70・2月の35.7から'71・2月の15.2になった。この低下はリーダーの交替を含む雄(adult)の離脱に原因したものであった。一方、出産性比率は'67年から次第に低下したが、この傾向は隣接群のP群についても同様であった。しかしながら、P群は'67年以前に圧倒的に雄の多かったことからみて、ほぼニホンザルの一般的な数値になってきたといえる。4年間の出産性比率はT群の81.3、P群の100.0であった。しかしP群については過去8年間の推定が可能で、それによれば、133.3となっていた。ところで、雄の離脱に関して、従来までは6才~7才がピークであるとされているが(河合)、T群の場合には顔にイレズミのマーキングをした結果、4才未満で50%という結果を得た。この結果は過去3年においても同様に推定されていたものであり、6才未満になると、同年令の雄のうち90%~100%の離脱が観察された。マーキングされた4才未満の離脱個体のうち、100%が近接群(他3群に)に加入していた。しかし4才~10才未満の個体で離脱後他群へ加入した例は3例にすぎなかった。ところが、10才以上の雄が離脱した場合には、50%強が近接群に接近し(セミソリタリー的)、離脱後1年~3年で完全にメンバーとして加入していた。(群れから離脱して一定期間後に他群に接近するので、'70・6月から'71・10月の期間に離脱した、T群の成雄のその後の消息は判明していない。)

結局、各年次のT群の3才以上の雄の全個体数をそれぞれ100とした場合、過去5年間の年平均の離脱は17で、加入は8であった。

次に雄の群間交流が群内婚を結果として避け、血の交流がおこなわれるかという問題であるが、(ソリタリーのブリーディング・シーズンにおける一時的な接近による交尾例ではなく)他群から完全に加入した個体の配偶関係を観察した結果、T群加入の完成熟雄2頭については、若年発情雌との場合が最も多くみられ、ついで群れにおける中核的血縁系に属する雌との関係が共通してみられた。T群の血縁系は大別して4グループであったが、最も順位の高い血縁系出身の雄は最下位の血縁系雌と高い頻度において配偶関係がみられた。このことは群内の配偶関係が自己の血縁系を避け他の血縁系とにおいて高い頻度において成立することを示しており、群内配偶構造の大事な機構を示していると考えられる。さらに上位血縁系の成雄が最も個体数が多く長期群内に残っている点を考慮したとき、他群の加入雄が上位血縁系の成雄と配偶関係をもつことは、意味のあることであると考えられる。

湯河原における野生ニホンザルの社会生態学的研究

岡 野 恒 也(明星大・人文・心理)

神奈川県湯河町奥湯河原から箱根にかけて天照山群(T群)、パークウェイ群(P群)、広河原群(H群)、およびすくも群(S群)の4群の野生ニホンザルが棲息し、このうちT、P、Hの3群は奥湯河原側の斜面に、比較的接近して、行動域を重複させながら棲み分けている。1968年よりT群において顔に入れ墨のマークをつけて調べたところ、比較的若いオスが他の3群に入りこんでいることが分かった。このように接近した群れでは、テリトリーの境界は硬いものではなく、群れ落ちた若いオスはかなり容易に他の群れに受け入れられるようである。

1970年秋から1971年にかけて、T群について次の研究を行なった。

(1) adult maleの順位の確認: 例年群れは6月末より11月まで遊牧に出る。T群のトップリーダーは1965年以来Jir3であったが、1970年11月、餌場にもどった群れからJir5は離脱していた。1970年6月と12月のadult maleの順位を表1に示す。表中※印は、遊牧中に群れから離脱したものを示す。6月には4位までがリーダークラスと認められたが、12月には、3位のSatoruまでがリーダークラスと認められた。6月に10位であった